
HEARTS

泉 伊澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H E A R T S

【Nコード】

N 4 5 2 1 C

【作者名】

泉 伊澄

【あらすじ】

「触れた人の想い人の名前がわかる」という特殊な能力を持った少女、水月沙耶の恋愛物語です。

序章（前書き）

初めての投稿なのでまだド下手ですが、頑張っていこうとおもいますので、よろしく願いします。

序章

初めて男子から告白されたのは中2の時だった。

相手は小学校の頃から仲の良かった幼馴染。

私にはそういう気はなかったので、当然断った。

その日以来、彼とはほとんど話さなくなってしまった。

その2ヶ月後、今度は中1で作った男友達から告白された。もちろんそれも断った。

やっぱり彼ともその日以来話さなくなってしまった。

せつかく男子と仲良くなっても告白されて結局話さなくなってしまう。

そういう事が何度も続くと、男子と話すのが嫌になってきた。

決して男子と話すのが嫌いなわけではない。

むしろ好きだからこそ辛いのだ。

このようなことが続いていた頃、私はあることを願うようになった。話している男子の好きな人が知りたい、そうすれば告白されることなく話せる、と。

そして、奇跡は起こった。

原因は交通事故。

相手はトラックで、運転手は居眠り運転をしていたようで、私にお咎めはなかった。

その事故の後、私に一つの能力が宿った。

それは、「触れた人の想い人がわかる」という能力だった。

「水月〱、今度夏祭り行かない？夏祭り。」

そう言ってきたのは男友達の斉藤雄二。

普通に聞いているとデートの誘いかと思われるかもしれないが、別に二人で行くわけではない。

この言葉の裏には「愛花も誘って」の意味が込められている。

そう、彼は隣のクラスの橘愛花に片想い中なのだ。

で、一人で誘う勇気が無いから私、水月沙耶の同行を求めているわけだ。

「了解♪3人で行こうね♪」

わざと「3人で」の部分を強調して返してあげた。

雄二の「馬鹿、怪しまれるだろ!」という小さな叫びに「もうみんな気づいてるし」と心の中で突っ込みつつ、沙耶は隣のクラスへ移動した。

1年前、雄二に恋の相談された時は特に驚かなかった。

雄二が愛花のことを好きだってことは初めて話した時から知っていたから。

いや、むしろ雄二に好きな人がいなかったら話しかけたりはしなかっただろう。

沙耶はあの日以来、ずっとそうしてきた。

好きな人のいる男子には積極的に話しかけ、いない男子にはできる限り近づかない。

そして、自分のことを少しでも好きな男子にはわざと冷たく振舞う。こうすることにより、沙耶は自分への告白を防いできた。

自身それを逃げだと感じながら・・・

第2話 出会い

「おーい、早く行こうぜ！早く！！」

テンション上がりまくりの雄二が向こうの方で叫んでいる。

今日は約束の夏祭りの日。

約束通り愛花を誘うのに成功して現在3人で祭りの中を歩いている。年に1度しかない祭りだけあって多くの人が集まっていた。

人々の大半は老若男女問わず浴衣姿。

他の人々が見たらちよつと違和感があるかもしれないが、それが沙耶たちの町の風習であった。

だから、愛花も雄二も沙耶も3人とも皆浴衣姿だった。

沙耶は赤色の、愛花は桃色の浴衣を着ていた。

桃色の浴衣が愛花の明るいイメージとすごくマッチしていて、とても似合っていた。

案の定、愛花を見た雄二は言葉を失っていた。

こんなんで祭中大丈夫かな？と思っていたが、話題については沙耶が特別に作ってあげる必要はなかった。

最初こそ浴衣姿の愛花に見惚れて言葉数の少なかった雄二だったが、だんだんとテンションが上がっていき、今では一人でもものすごい勢いで話していた。

そんな雄二が話すのを、沙耶は笑いをこらえながら、愛花は微笑みながら聞いていた。

愛花と話している雄二を見るのは面白い。

沙耶と二人で話している時とは全く違った表情を見せてくれるからだ。

そういう雄二を見てみると、雄二は本当に愛花のことが好きなんだなあと、ちよつと羨ましく思う。

沙耶にはまだ人を好きになるという経験をしたことが無いのだ。

まあ、好きな子のいる男子にしか話しかけてないんだから当然と言

えば当然だろうけど。

沙耶は腕時計を見た。

うん、そろそろだろう。

「あ、ちよつと私他の人と待ち合わせがあるからここで別れるね」
もちろん嘘である。

「え、花火大会だけでも一緒に見ようよ」
と愛花。

「その花火大会と一緒に見る約束があるんだって。」

「さては男か？」

「さあ、それはどうでしょう？」

もちろんいる筈は無いけど。

結局愛花にはしぶしぶ承諾してもらい、沙耶は別方向へと歩いて行った。

別方向といっても自分の家の方向だけだ。

一人で花火を見ててもしょうがないので、帰宅することにしたのだ。皆が祭りに行く流れの中を帰るのは意外と空しかった。

「私にも好きな人とかいたらいいのになあ・・・」

全くもって身勝手な話だと自分でも思うのだが、やっぱり好きな人は欲しいのである。

いつもこっちが好きになる前に告白されてきたから。

相手を好きになる時間がないのである。

全く、男子って本当に考えて告白してるの？

実は顔とかスタイルしか見てないんじゃないの？

普段悩みの少ない沙耶が珍しく考え事していると、向こうからもすごい勢いで車が走ってきた。

当然考え事をしていた沙耶が気付いたころにはもう遅く・・・

その状況を把握するのに沙耶はしばらく時間がかかった。

まず気付いたのは、どこも怪我をしてないこと。

次に自分が芝生の上にいること。

そして自分の上に人が乗っかっていること。
そして、その人の性別が男であること！

第3話 少年と祭り

沙耶はかなり混乱した。

何でこんな状況になってるんだろう。

あ、そういえば車に撥ねられそうになったっけ。

何で助かってるんだろう？

色々思考した挙句、ようやく自分がその少年に助けられたという事実に気が付き、慌ててお礼を言おうとしたときにはすでに遅く、少年が口を開いていた。

「大丈夫ですか？どこか怪我とかはありませんか？」

「えーと、とりあえず大丈夫みたいです。助けていただきありがとうございます。」

「いや、お礼とかはいいですよ。車に撥ねられそうになった人見たら普通助けるでしょ？だから君が無事ならそれでいいんです。」

「でも、命を助けてもらったんだし何かお礼はしないと・・・私ができることなら何でもしますので。」

「別にいいんですけど・・・あ、そうだ！」

「何でしょう？」

「一緒に花火大会見に行きませんか？」

「え？」

「花火大会。俺行こうと思ってただけど、まだこっち引越してきたばかりだからまだ友人がいないです。もしあなたが良ければ、でいいんですけど。」

少年の突然の提案。

そこで、沙耶は相手に気づかれない程度に少年の手に触れてみた。一応好きな相手は誰もいないことは判明。

本当だったら避けたい相手なのだがこの状況でそれも言ってもらえない。

「わかりました。では、一緒に見に行きましょう。」

「良かった。一人で見る花火大会ほどつまらないものは無いんですよ。あ、軽く自己紹介しとくと、僕の名前は空風銀河そらかぜぎんがで、歳は16です。」

「私は水月沙耶。歳は16。って同い年だったの!？」

「俺も驚きです。てつきりそちらが年上かと。」

「え、絶対君の方が年上だと思ってた。」

お互い笑いあいながら祭りの方へと向かっていった。

花火大会は今までで1番楽しかった。

雄二や愛花と行った時とはまた違う楽しさだった。

そもそも男性と二人きりで行ったこと自体初めてではないだろうか？

しかも銀河には好きな人がいない。

ということは自分のことを好きになるかもしれない。

でも、今はそんなことはどうでも良いくらい楽しかった。

花火を見て、お互い感想とか言い合って、笑いあう。

それだけのことなのだが、沙耶にはとても楽しく感じられた。

花火大会が終わった後は二人で出店を回った。

花火大会だけの約束だったことはとくに忘れていた。

結局祭りが終わるまでずっと銀河と一緒にいた。

楽しいことをやっていると時間は早く感じられるものである。

沙耶はこの祭りでそのことを実感した。

もう少し祭りが長ければいいのに、と思ったのは初めてだった。

そして銀河との別れの時もあつという間にやってきた。

「いやあ、今日は本当に楽しかったよ。ありがとね、付き合ってくれて。沙耶さん。」

「いや、こっちこそすごく楽しかった。今までで一番楽しかったかも。」

「沙耶さんに楽しんでもらえてよかったよ。じゃあ、また明日」

「うん、サヨナラ」

え？また明日？

家に帰って気がついた。

明日会えるわけじゃないじゃん、と。

なんで「また明日」なんだろう？

次の日、その答えがわかった。

彼、空風銀河はうちの学校に転校してきた。
しかも、同じクラスに。

第4話 自己紹介

「空風銀河です。これから半年の間、よろしく願います。」

銀河の簡単な自己紹介が終わると、ものすごい歓声と拍手が飛んだ。これは、別に銀河が特別というわけではなく、うちのクラスのいつものノリなのである。

普通なら手を挙げて転校生に地元のことや前の学校のことなどを色々質問して終わりだろう。

しかし、うちのクラスの生徒はそれでは済まない。

転校生との握手は当たり前、ときには「友情表現だ」と言い張って抱きつく生徒もいる。

問題児で有名の黒原は、どこから出したのかクラッカーを持ち出し、パンパンやっていた。

当の銀河はというと、この変なノリについていけず戸惑った様子でなすがままになっていた。

一方女グループは、この新しい転校生の格好良さをチェックして、話し合っている。

しかし、今回沙耶は珍しくこの輪の中に入らず、ぼんやりと銀河を見ていた。

最初銀河を見た時は驚きが心の大半を占めていたのだが、だんだん「また会えて良かった」という安心感と嬉しさがこみ上げてきた。「誰も好きな人がいない男性」に対してこのような気持ちを抱くのは沙耶にとって初めての体験だった。

そのような気持ちでボーっとしていたら、愛花にからかわれた。

「沙耶〜〜、どうしたの？一目惚れでもした？あの転校生に。」

「はい？」

突然の問いに声が裏返ってしまった。

この反応を見て、愛花がクスッと笑った。

愛花のこのクスクス笑いは、からかい開始の合図である。

「へえ、沙耶が一目惚れするなんて前代未聞ね。あの転校生のどこら辺が気に入ったの？」

「違う！一目惚れなんかじゃない！！」

何かひどく反論するところを間違えた気がする。

「へえ・・・一目惚れじゃないんだ。っていつかそうだよ、沙耶が一目惚れするわけないもんね。」

「え？う、うんそうだよ。私が一目惚れなんかするわけないじゃん。」

「

「ってことは実は知り合いの彼氏さんかな？あ、そういえば花火大会の日何か約束があるって言ってたよね。それって、もしかして・・・」

「

「違う！あれは・・・」

「雄二に頼まれて・・・」と言いかけて思いとどまった。

このことはくれぐれも内密に、と雄二から念を押されてるのである。こうして沙耶はHR中、愛花からの追及の言い訳探しにオロオロし続けることになってしまった。

結局今回のHR（というかもはや銀河の歓迎パーティー）の間中、結局沙耶と銀河はオロオロし続けるハメになってしまった。

第5話 沙耶の新生活

結局、沙耶が銀河と話せたのは帰りの電車の中だった。

学校にいる間は、銀河は男子生徒の輪の中で色々質問等されてたし、沙耶は愛花の質問攻めから逃れるので精一杯だったからだ。

愛花は自分の恋愛には興味無いのに、他人の恋愛話になると途端に目を輝かせるのだ。

だから、自分の幼馴染であり、今や学園のアイドル（沙耶は否定しているが）的存在な沙耶の恋愛話なんて最高だったらしい。

「クラスの人たち、個性豊かな人多いね。」

最初に口を開いたのは銀河だった。

「銀河君、言葉選ぶの上手だね。おそらくあいつらをそこまで美化して言えるの君くらいだと思うよ。」

「ははは・・・」

銀河はそれから色々なことを話した。

銀河が転校前にいた学校のこと。

銀河は前の学校ではほとんど友達を作れなかったこと。

そして、今一人暮らしをしていること。

家事とか大丈夫なのかと尋ねたらメイドさんがすべてやってくれているとのこと。

メイドさんって本当にいたんだ・・・

沙耶は、銀河が話しているのを聞いているだけだったが、とても楽しいかった。

別に特別に面白い話をしているわけではないんだけど、何故か楽しいのだ。

こうしているうちにいつの間にか駅に到着していた。

「じゃあ、銀河君これからよろしくね。」

「うん、こちらこそよろしく。じゃ。」

と言って電車から降りた。二人とも・・・

「って、銀河君ここの駅だったんだ!？」

「沙耶さんこそ!へえ、すごい偶然だね。」

二人で感嘆の声を上げていると後ろから冷やかな声が飛んできた。

「というかそうじゃなかったら夏祭りで一緒になることないと思うけど。」

「あー、そっか、なるほどね。って愛花!？」

そう、それは今日部活動で遅くなるはずの愛花だった。

「話は全て聞かしてもらったわ。ついでに録音もね。」

口をパクパクさせている沙耶をよそに、愛花は銀河に声をかけた。

「私は、沙耶の幼馴染の橘愛花。あなたが転校生の空風君ね。沙耶と同じように銀河君って呼んでいいかしら？」

「うん、構わないけど・・・」

愛花はそう言いながら銀河の顔をジッと観察している。

そして、結論を出した。

「ブサイク・・・」

「初対面にいきなりそれ!？」

「まあ、それは冗談。でもそんな特別に格好いいってわけでもないし、変ったところも無い、平凡な顔ね。そんな男になんで沙耶が・・・」

「」

「あの、声小さくてよく聞こえないんだけど・・・」

「気にしないで、独り言。」

愛花はしばらくブツブツ言っていたが、やがて笑顔でこう言った。

「まあ、何はともあれ沙耶のことをよろしく。」

「はい?」

「あの子、すごい奥手だから、お付き合いとかは慎重に・・・ムガッ」

放心状態だった沙耶は我にかえって愛花の口をふさいだ。

「ごめんね、銀河君。今の話全て忘れてくれる?」

「え?でも・・・」

「忘れてくれる?」

「はい・・・」

沙耶のただならぬオーラを感じ取って、銀河は口をつぐんだ。

「じゃあ、帰ろう。これ以上変なこと言わないでね、愛花。」

「はい」

笑顔で答える愛花。

こうして結局、3人で帰ることになった。

時々愛花が変なことを言おうとするのを止めながら、ガラガラと話しながら歩いていたら、早くも沙耶の家の前に着いた。

「へえ、ここが沙耶さんの家なんだ・・・」

銀河は感心したような口調で言った。

「別に普通の家でしょ？じゃあ、今度こそじゃあね、銀河君。」

沙耶が手を振りながら言った。

「じゃあね、銀河君。明日沙耶のいないところでじっくりと話でも、って痛い！痛いよ、沙耶！！」

愛花が沙耶の振っていないほうの手で腰をつねられて苦痛の表情で言った。

「うん、これからよろしくね、二人とも。」

笑いながら言う銀河。

こうして、3人は別れる・・・はずだった。

「って、銀河君の家そこなの！？」

沙耶が自分の家の真正面の家を指しながら叫んだ。

「うん、そうだよ。だから、「これからよろしく」って言ったんだけど・・・」

銀河が笑いを押し殺したような顔で言った。

「だって祭りのときは違う方向帰ったじゃん！」

「祭りのときはついどこかで食べてこうと思って・・・」

「まあまあ、沙耶落ち着きなさい。良かったじゃない、愛しの銀河君と隣同士、って痛い！」

今度は首をつねられた愛花が痛がりながら言った。

はあ、これからどういう生活になるんだろう、沙耶はそう思いなが

らひたすら愛花の首をつねっていた。
こうして沙耶の新たな生活が始まるうとしていた。

第6話 少女

次の日、沙耶は銀河の家の前で待っていた。

昨日の夜、ベランダ越しに約束したからだ。

学校に行く道がわからないらしい・・・

昨日は行けてたじゃん、と言ったら昨日は初日だから車で行った、と返してきた。

何やら朝起きたら迎えの車が来ていたらしい。

せっかく来てくれたものを断ることもできず、学校まで送ってもらったとのこと。

メイドはいるわ迎えの車は来るわ、聞いていると結構なお金持ちである。

で、今日からは自分で行くと言いつ聞かせて帰ってもらったため、今日は一人で行かねばならず、沙耶の助けを借りたのである。

数分後、やっと銀河が家から出てきた。

「ごめん、待った？」

「ううん、大丈夫。」

「ごめんね、俺朝弱くて・・・」

確かにすごい眠そうだった。

それでもちゃんと時間どおりに家から出てくれたのは、ひとえに銀河の下で働いているメイドさんのおかげだろう。

しばらく話しながら歩いていると、後ろから声が聞こえてきた。

「ご主人様～～、お待ちください、銀河様～～!!」

振り返ると、学生服姿の可愛い少女がものすごい勢いで走ってきていた。

おそらく歳は13歳か14歳か。

少なくとも私よりは年下っぽかった。

その少女は、沙耶にペコッとお辞儀をすると、銀河にある物を手渡した。

それは数学の教科書だった。

「今日3時間目に数学ありましたよね？家に忘れてましたよ。」

「ああ、ごめん。ありがとね、葵。」

その少女は葵というそうだった。

葵はさらに銀河にこう言った。

「銀河様、銀河様をつけている人がいます。男一人と女一人です。くれぐれもご注意ください。」

「えっ!？」

銀河は驚いたようだったが、沙耶は大体の予測はついていたので、呼んでみた。

「愛花、雄二、そろそろ出てきたら？バレてるわよ。」

沙耶の予測通り、愛花と雄二の二人が出てきた。

「沙耶、やるわね。私の完璧な尾行を見抜くとは。」

「水月、違うんだ！これは誤解なんだ！俺はたまたま歩いてただけで・・・」

反応まで予想通りとは。

沙耶は半分呆れながら聞いてみた。

「で、わざわざ尾行して何やってたの？」

「それは、あなたと銀河君を見守るため・・・って今はそんなことどうでもいいや。」

「どうでもよくないんだけど・・・」

「それよりその子は誰？銀河君。随分と親しそうだけど。」

愛花が、葵を指さしながら言った。

「ああ、紹介するよ。彼女はうちでメイドをやってくれてる星川葵。ほしかわあおい歳は俺と1歳差で、14。でもって俺の幼馴染。」

沙耶も雄二も愛花も啞然としている中、葵はお辞儀をして言った。

「紹介にあずかせて頂きました、星川葵です。銀河様のもとでメイドをやらせて頂いています。どうかお見知りおきを。」

第7話 葵

「14歳でメイドなんてできるんだ〜すごいね。」

愛花が尋ねる。

もつともな質問だ。

「ありがとうございます。しかし、正確にはまだ見習いですが、今通ってるのもそういう専門学校です。」

葵が答える。

へえ、メイド育成学校なんてあるんだ・・・

「それどこにあるの？聞いたことないんだけど。」

と再び愛花。

「東京都千代田区の秋葉原駅の近くにあります。」

いや、それ何か違う気が・・・

「あ、そろそろ時間ですので、私はこれにて失礼します。銀河様、今日のお帰りは何時になりますか？」

「うーん、まあ5時くらいかな？」

「では、それまでには戻っておきます。」

と言って、軽く会釈をすると沙耶たちと反対方向に走って行ってしまった。

「何かいろいろ間違ってる気が・・・」

という沙耶のつぶやきに、

「まあ、本人納得してるんだしいんじゃない？」

と雄二。

「だって、14歳でメイドっておかしいでしょ・・・それに銀河君と幼馴染でしょ？そんな子が同じ家に住んでるなんて・・・」

という沙耶のつぶやきに愛花がクスツと笑った。

沙耶の背筋にゾクツと寒気が走る。

この笑い方はまさか・・・

「あれ？沙耶、もしかしてやきもち妬いてるの？」

沙耶の予想は的中していた。

この笑いはからかい開始の合図である。

「えー？ いや、そんなんじゃ・・・」

「まあ、確かに年頃の男女が一つ屋根の下。これはなにがあってもおかしくは・・・」

「ねえ、さっきから何の話してるの？」

と銀河が割り込む。

どうやらさっきから話の内容についていけないようだ。

「ん？ 簡単に言つと沙耶がね・・・ムゲツ！」

間一髪で愛花の口を塞ぐ。

「何でもないから、銀河君。さあ、行きましょう！ そろそろ急がないと遅刻しちゃうよ？」

沙耶が愛花の口を塞ぎつつ、言った。

そして、自ら走り出した。

「うわ、沙耶さん、待ってよ！」

銀河も走りだす。

それを見て雄二も走りだした。

こうして沙耶たち4人は学校まで走り続けることになった。
そして、学校についたのは・・・授業開始の20分前だった。

第8話 悩める少女

最近の自分は変だ、と沙耶は思う。

いつもなら愛花のからかいなんて軽くかわせてたのに・・・

銀河が来てからは愛花のいいからかいの^ま的になってしまっていた。
何故だろう、と考えてみる。

別に銀河のことが好きとかそういうんじゃない。

でも、べつに嫌いではない。

話していたって別に特別なことなど何もない。

いつも話しているそこら辺の男子とそれほど大差はない。

ただし、ただ一点だけ他の男子と違うところがあった。

それは普通の人にはわからない、沙耶にだけがわかること。

それは銀河には好きな人がいない、ということだった。

沙耶は今までそういう人との関わりは避けてきた。

自分のことを好きになられて、こっちの気持ちに傾く前に告白されるのは嫌だから。

こう言々と自意識過剰のように聞こえるが、実際そうなのだから仕方がない。

中3の文化祭で無理やり出場させられたミスコンで優勝してからは特にそうだった。

勝手に「学園のアイドル」なるレッテルを貼られ、皆から特別視されるようになり、なかなか男子生徒と話せなくなってしまった。

話しかけても数分するとその人の気持ちに自分へ傾くようになってしまったのも一つの原因だった。

そんな沙耶が取った行動が、「好きな人がいる男子とだけ話す」とだった。

しかし、銀河は違った。

どれだけ話しても自分に気持ち傾かない。

沙耶にはそれがごく不思議で、そして嬉しかった。

あ、もしかしてこの感情のせいかな？最近愛花の尋問にあたふたしちゃうのは。

うん、きつとそうだ。納得、納得♪

沙耶は勝手に自分で結論を出した。

そして、気がつくとも1時限目の英語の授業が終わっていた・・・
あとできちんと教科書読んどかなきゃな、と沙耶は一人で苦笑した。

第9話 部活

昼休み、沙耶・雄二・愛花・銀河の4人は山岳天体部の部室で昼飯を食べた。

教室では暑くてたまらないからだ。

部室で冷房を効かせた方が断然涼しい。

ちなみに山岳天体部とは、山岳部と天体部が合併してできた部である。

その名の通り山を登って星を見るのである。

あちこちの山の頂上に元天体部の天体望遠鏡が数台ずつ設置されているから、わざわざ望遠鏡を持って行かなくても大丈夫らしい。

沙耶、雄二、愛花はこの部に所属しているが、最初の合宿は夏休みなので皆合宿は未経験である。

やったことといえば、せいぜい学校で夜に星を観察したぐらいだ。

「へえ、結構本格的なんだね〜」

銀河が感心した様な声で言った。

銀河はさつきから天体望遠鏡に夢中である。

星を見るのは好きらしい。

「最初の合宿は7月21日らしいよ。空風も興味あるんなら入ってみたら？今入ればまだ間に合うぜ？」

提案したのは雄二。

まあ、雄二が提案しなくても沙耶が提案するつもりだった。

というかこの銀河の様子を見たら誰でも誘いたくなるだろう。

「うん、是非お願い。でもその前に両親の許可もらわないと。」

「両親の許可が必要なの？」

沙耶が訊く。

「うん、うちの両親は異常な過保護でね。だから、いらないうて言ってるのに迎えの車よこしたり、今回だってメイドを何人もよこそうとしたんだよ。警備員も雇おうとしたりして断るのが大変だった

んだ。」

銀河が本当にめんどくさいという感じで答えた。

「だからめんどいけど一回両親説き伏せないと。あの両親なら『山登りは危ないから駄目』とか『それなら警備員とか雇わないと』とか言い出しそうだからね。そんなことになったらせつかくの雰囲気がぶち壊したよ。」

金持ちも金持ちで大変なんだなあ、と沙耶は実感した。

しかも両親が過保護とは……

「じゃあ、良い返事待ってるよ。まだ時間はあるからゆっくりと説き伏せてきてくれ。」

と雄二。

「そうよ。沙耶もこの前、『銀河君と一緒に星みたいなあ……』って言ってたことだし。」

「そんなこと言った覚えないんだけど！」

愛花の言葉にすかさず突っ込みを入れる。

「わかった。沙耶さんの為にも頑張るよ！」

「もう、銀河君まで……!!」

銀河はあはは、と笑った。

こうして残りの昼休みは無駄話をして終わった。

銀河が条件付きで両親の許可を取ったのは、3日後、夏休み直前の日だった。

その条件とは……メイドの葵を連れいていくことだった。

第10話 合宿

「では一旦5分ほど休憩する。」

山岳天体部部長の鈴木先輩が、休憩用のベンチを見つけて号令をかけた。

今山岳天体部は合宿所へ行くための登山中である。

この合宿は自由参加であるにも関わらず、ほとんどの部員が参加していた。

沙耶は登山は苦手だ。

登山は景色がよくていいと言う人はいるが、本当に景色が見えてるのは最初だけである。

ある程度以上疲れると景色を見る余裕がなくなってくるのだ。

しかも一人や二人で登るわけではなく、団体で登っているので、皆とペースを合わせなきゃいけない。

ここの部活は元々登山部と天体部が合併した部だ。

だから、半分は登山専門の方々なわけで。

明らかにペースが早かった。

「よし、5分経過したぞ。出発だ！」

鈴木部長が再び号令をかける。

「うわ〜、もう出発かよ・・・そんなに急がなくても山は逃げないぜ？」

雄二が汗を拭いながら言う。

雄二も銀河も愛花も登山は苦手らしい。

そんな中一人元気なのは・・・

「銀河様、早く行きましょう。何なら荷物お持ちしましょうか？」

銀河のお付きメイド、葵である。

いったいあの小さい体のどこにそんな体力があるんだろう・・・

「いや、いいよ。自分で持って登んなきゃ登山の意味がないから。」
そう言って銀河が立ち上がる。

大した信念だ。

「葵ちゃん、俺の持つてくれない？代わりに。」

という雄二の情けない提案を、

「なんで私が斉藤さんの荷物を持たなきゃいけないんですか？」

葵が容赦なく切り捨てた。

「うわゝゝ、何この対応の違い・・・」、とブツブツ言いながら立ち上がる雄二を見て、

「じゃあしょうがない、行きますか。」

愛花もお気に入りのスカートについた土を払いながら立ちあがった。本日の愛花の服装は、白いシャツに白いスカートという極めて普通の格好だった。

最初、元山岳部部員たちに文句を言われるんじゃないかと思っていたが、大丈夫だったらしい。

ちなみに沙耶は普通の登山服・ズボンに麦わら帽子を被っただけの簡素な服装である。

文句言われないんだったら普通の服着てくれば良かったなあ、と思う。

この登山服は昨日父親から拝借したもので、デザインがちょっと古いし男物なのだ。

これを皆に見せるのにあまり乗り気はしなかった。

「了解。」

最後に沙耶が立ち上がる。

こうして再び登山が始まった。

結局頂上に着いたのは、昼の3時くらいだった。

登山&天体観測が活動内容なので、夜9時までは特にやることはない。

というわけでとりあえず宿に入ってくつろぐことにした。

部屋は適当に決めた。

ちなみに女子が3人しかいないので、部屋が男女で別れることはな

かった。

だから当然部屋のメンバーは愛花・沙耶・葵・銀河・雄二と、いつものメンバー＋葵になった。

そして、夕飯までの間雄二が持ってきたトランプで時間をつぶした。時間は刻々と過ぎていき、午後6時の鐘がなるうとしていた

第11話 風呂場にて

午後6時を回ったところで風呂に入ることにした。

部屋は男女混合だったが、さすがに風呂は分かれていた。

風呂は露天であった。

ちょうど今日は新月（というか新月の日を選んだんだけど。）なので、星が綺麗だ。

ただ、ちよつと雲がかかっているので天の川までは見えなかった。

そうやって沙耶が星空を見上げながら歩いていたら・・・

「ぎゃっ！」

風呂の淵に足をひっかけて頭から湯船に突っ込んでしまった。

しかも風呂の底に頭をぶつけて非常に痛かった。

それを見た愛花は爆笑し、葵は「大丈夫ですか!？」とこつちへ向かってこようとしてシャワーに頭をぶつけ、悶絶していた。

頭の痛みも引き、愛花の笑いも収まって落ち着いたところで、せつかくだし葵に色々聞いてみることにした。

「葵ちゃんって学校とかは行ってないの?」

「今は行ってません。メイドとしての修業をしなくちゃいけないんです。」

葵はぶつけた頭を撫でながらそう言った。
相当痛かったようだ。

「中学校までは義務教育のはずだけど・・・」

「はい。ですから小学校の頃に飛び級で全て終わらせました。」
サラッとすごいことを言う葵。

へえ、飛び級なんて制度あるんだ・・・

メイドといい、飛び級といい、葵には色々と驚かされる。

それから風呂に入ってる間、沙耶は葵と色々と話をした。

メイドという職業をやっていると言うので葵にはちよつと堅い印象があったのだが、話してみると口調は堅いものの意外と普通に話せ

た。

「そういえばさ」

珍しく今までおとなしかった愛花が壁のある部分を指して言った。

「あそこに扉あるのわかる？小さい扉。何であんなところに扉があると思う？」

たしかにそこには顔くらいしか出せないくらい小さな扉がある。

別にあそこに扉があっても意味無いじゃん、と思いながら沙耶が答える。

「さつき店の人に聞いたんだけど、あそこは恋人同士があそこで話せるように、ってことらしいよ。ちなみに女湯側からしか開かないから変な目的で使われることはないみたい。」

「しかし、相手が恋人しかいないとは限らないじゃないですか。わざわざ大声で聞くのも気がひけますし。」

と葵の至極もつともな質問。

「だから店員は、現実にはやる人がいるかはわからない、って言うてた。」

「もしやる人がいないとするともものすごく意味無いね、この扉。」

沙耶は言った後、すぐ後悔した。

さつきから愛花が何を言おうとしているのか、わかってしまったから。

そして、沙耶の悪い予感の外れることなく・・・

「じゃあ、せっかくだし開けてみようか？」

愛花が提案する。

「何でそうなるんです！」

葵が反論する。

「だって使わなきゃ意味ないし。」

と愛花。

「じゃあ、開けるよ、準備はOK？せーの！」

普通だったら冗談だと思うだろう。

しかしこれを言ったのは愛花である。

沙耶も葵も躊躇いなく愛花を押さえつけた。
そして、愛花を更衣室まで運んで行った。

更衣室内で。

「もう、二人とも本気にしちゃって。冗談よ、冗談。」

「嘘つけ!!」

二人の声が更衣室内に響き渡った。

第12話 天体観測

夕食を食べた後はいよいよの天体観測である。

とはいえ、今日は特に目標を設定したわけではないので、結構皆だらだらやっていた。

本番は3日後の獅子座流星群である。

で、星の見えやすい新月の日を狙って今日から3泊4日の合宿というわけなのだ。

だから、今日・明日・明後日は特にすることもなくただ星を眺めるだけだ。

参加も自由である。

今日は少し曇っていて、また登山で疲れ果てていたので、大半がもう眠っていた。

だから観測場所も自由で、沙耶・愛花・銀河・雄二の4人は合宿所から歩いて3分くらいのところにある高台の芝生の上で寝転がりながら星を見ていた。

葵は銀河の部屋の片付けをと言って合宿所に残った。

4人とも、もちろん望遠鏡などは持ってきていない。

沙耶は芝生に寝転がりながら「っと星を眺めたり、時々愛花と雄二の方を見ていた。

雄二は合宿に来る前、「愛花に星座を教えるんだ」と張り切って星座や星の名前などを覚えていたのだが、今は逆に愛花に教えられていた。

まあ、当然だろう。

愛花は中学時代も天体部に入っていて、同じ天体部だった沙耶に色々教えてくれていた。

そして、愛花目当てで天体部に入った男達が、愛花の話についていけずに困惑している姿を沙耶は何度も見てきた。

そのことも一応雄二に言っておいたはずなのだが、「いや、橘にも

きつとわからないこともある」とあきらめず勉強していた。

でも、愛花の話に何とかついていけているということは、一応その努力も無駄ではなかったようである。

愛花の話についていくこと自体、奇跡に近いのだ。

雄二は愛花と話ができて嬉しそうだし、愛花も星に関しての話し相手ができて楽しそうだった。

沙耶が二人の方を見ていると、銀河が隣に座って話しかけてきた。

「仲良いんだね、あの二人。一緒にいる時多くない？しかもあの愛花さんと話が続くなんて・・・。もしかして付き合ってるとか？」

「うーん、とりあえず付き合っていないかな。今はまだ雄二の片想い中。一緒にいることが多いのは雄二が積極的に『愛花を誘ってくれ』と私に頼むから。だから最初は私がいて途中から二人になることが多いかな。」

「雄二君、積極的に動くのは感心なんだけど、動き方がすごく格好悪いなあ・・・。」

銀河が至極もつともな突っ込みを入れる。

「まあ、それだけ聞くとすごく格好悪く聞こえるけど、結局愛花と話し続けることができてるのは雄二だからね。私がいなくなったら話題が無くなったりすることはほとんどない。それは雄二自身の力なんだよ。まあ、自分で誘えたらもつといいんだけどね・・・。」

沙耶はそう言って微笑んだ。

銀河も顔に微笑を浮かべながら言った。

「沙耶さんってすごいね。」

「へ!？」

突然の銀河の言葉に沙耶はそれしか言葉が出なかった。

銀河は淡々と続ける。

「だって沙耶さんって、友人の長所とか短所をしつかり把握してるんだもん。しかも短所などを話すときに忘れず長所を強調する。なかなかこんなことできないよ、普通。」

「え、いや、その・・・。」

沙耶は言葉が出なかった。

嬉しいような、恥ずかしいような、照れたようなそんな感情が一気に押し寄せてきて頭が混乱しているのだ。

どんどん自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

何なんだろう、この気持ちは。

今まで沙耶が経験したことのない気持ちだった。

こうして二人の間にしばらく沈黙が続いた時。

「バキッ」

背後の茂みから木の枝が折れる音が聞こえた。

そしてそれに続いて洩れる男女の声。

沙耶は黙ったまま立ち上がり、バツと茂みを開いた。

沙耶の予想通り、そこには聞き耳を立てた雄二と愛花の姿があった。

沙耶は二人に言った。

「で、何か言い残すことはある？」

咄嗟に逃げだす二人。

沙耶は「待ちなさい！待て〜〜！！」と叫びながら二人を追いかけて走って行った。

内心、ちよつと助かったと思いながら。

第13話 合宿2日目

2日目の朝。

沙耶は早めに目が覚めた。

別にこのまま2度寝しても良かったのだが、だいぶ汗をかいていたので一回風呂に入ることにした。

この合宿は3日目の流星群が本番なので、それまでは基本的に自由らしい。

だから朝寝坊しようが、いつ風呂に入ろうが何をしてもいいのだ。ちなみにそういう人もいるので、朝食は用意されていない。

だから合宿の栞の持ち物の欄に「朝食用のパン、及び小腹がすいたとき用の食べ物」と書かれていたのだ。

というわけで沙耶は、持って来たクリームパンを一個食べてから風呂へと向かった。

朝早いせいか、風呂にはまだ誰もいなかった。

風呂に入りながら空を見上げると、雲がいくつも浮いていた。

今日も快晴というわけにはいかないようだ。

この調子で流星群が見れるのだろうか。

沙耶が色々考えながらお湯に浸かっていると、隣の男湯の扉が開いて誰かが入ってきた音がした。

そして、風呂に入ろうとして「熱っ！」と叫ぶ声が聞こえた。

その声でその人物が誰だか分かったので、壁越しに声をかけてみた。

「銀河君」

「え？その声は沙耶さん？」

声の主、銀河が答える。

「やっぱりそうか。もしかして私が起しちゃったとか？」

「いや。雄二君の足が腹に降ってきたんだ。丁度ミゾオチに入っただけかと思った。」

銀河が答える。

なるほど、それは痛そうだ。

それからしばらくの間、沙耶は銀河と壁越しに喋り続けた。話題が途切れることはなかった。

銀河が相手だと不思議と話が続けるのだ。

そうして話し続けているうちに沙耶は危うくのぼせそうになり、風呂から出た。

沙耶が更衣室から出ると、銀河が更衣室の前で待っていた。

そして、沙耶に向って手招きしていた。

「どうしたの？」

沙耶が尋ねると、

「いいから、ちょっと来て。」

と言って部屋へと向かっていった。

そして部屋の中に入り、中を見ると・・・

雄二と愛花が仲良く抱き合って寝ていた。

「本当に仲のいい二人だね。」

銀河が言いながら笑う。

「本当だね。」

沙耶もそう言いながら微笑んだ。

そして、抱き合っている二人を横目で見て笑いながら、沙耶と銀河は2度寝をしようと布団に潜り込んだ。

次に沙耶が起きたのは、愛花に蹴飛ばされて痛みを堪えている雄二のうめき声が聞こえてきたときであった。

第14話 合宿2日目Part 2

結局2日目は、ずっと曇っていたため合宿所内でダラダラすごした。夕食の時間に部長から流星群の見える方角や時間などの説明があった以外、部活動らしい部活動はしていない。

天気予報によると、明日も曇りとのこと。

しかし、沙耶の部屋はそんなことはお構いなしに賑やかだった。

沙耶が本日2度目の風呂に入り終わって帰ってきて部屋ドアを開けた瞬間、枕が飛んできて顔を直撃するという有様だった。

それからしばらく枕投げに加わり、せっかく風呂入ったのにまた汗だくになってしまった。

だが、もう一回風呂に入るのも面倒なのでそのまま寝ることにした。そして、寝間着に着替えようとして沙耶はある事に気づいた。

「男女混合の部屋って着替えとかどうするんだろう?」

「更衣室とかどこにあるのでは?」

葵が答えながら周囲を見渡すが、更衣室らしき部屋の影はどこにもない。

昨日は普段着のまま寝てしまったので気付かなかったが。

「ストリップショー状態だね。まさに。」

愛花が呟く。

そして、男二人に聞いた。

「見たい?」

「いや、遠慮します。」

二人同時に返事した。

「何だよ? せっかくのチャンスよ?」

愛花の誘いに雄二が見透かしたように答える。

「どうせ金取る気だろ?」

「いいじゃない、たったの1万円で可愛い女子の着替えが見れるんだから安いもんじゃない?」

「んじゃ、俺たちは外で待機してようか、空風よ。」

「おう。」

銀河を連れて雄二が出ていく。

「ちっ、せつかくの収入だと思ったのに。」

愛花が舌打ちしながら言う。

「もしかして金くれたら本気で見せる気だったんですか？」

葵が訊く。

「当たり前じゃない。だから現実的な『1万』っていう数字にしたんじゃない。別にこっちは減るもんじゃないんだし。ちよつと羞恥心を抑えるだけで1万よ、1万。こんなに得なことがある？」

当然、という口調で愛花が言う。

啞然としている葵に沙耶が声をかける。

「昔からそうなんだよ、愛花は。いつも頭の中では『羞恥心<お金』だから。世の中にはそういう人もいるってことで流しといった方がいいよ。」

「はあ、そういうものですか。」

葵はやっぱり納得できない、という顔で答えた。

結局無事に着替えは終了し、皆そのまま眠った。

こうして合宿2日目は、最後までロクな活動しないまま幕を閉じた。

第15話 合宿3日目

3日目の朝。

沙耶は雄二の蹴りを腹部に受けた痛みで目覚めた。

少々腹が立ったので、戸棚にしまっていた暖かそうな毛布を5枚ほど雄二にかぶせておいてあげた。

これで雄二が他の人に迷惑をかけることもないだろう。

沙耶は朝食のパンを食べた後、外に出てみた。

空を見上げると天気予報通りの曇り空。

しかも湿度は高く非常に蒸し暑い、嫌な気候だった。

予報では、しばらくこの気候が続くそうだ。

特にやることもないのでブラブラ歩いていると、望遠鏡の整備をしている銀河を見つけた。

どうやら銀河は整備に集中していて近づいている沙耶に気づいていないようだ。

沙耶はそんな銀河にそーっと近づき、銀河の背中を背骨にそって指でなぞった。

「ぬあつ！」

予想通りビクンと背中をそらして、変な声をあげる銀河。

沙耶は思わず笑ってしまった。

「ひどいなあ、沙耶さん。ビックリした〜。」

「ごめんごめん、なんか人が集中してるのを見るとつい、ね。」

沙耶はそう言いながら銀河の隣に腰をおろした。

「すごい曇ってるね。朝なのにこんなに暗いとは。」

銀河が望遠鏡のセッティングをしながら言う。

「晴れてくれるといいんだけど。」

沙耶はポケットの中にあるものを出して銀河に渡した。

「これ昨日作ったんだ。これ吊るしとこうよ、どこかに。」

それはテルテル坊主だった。

銀河はフツと笑いながら、

「そうだね、でもどこに吊るそうか？」
と尋ねた。

「普通は部屋とかじゃない？」

「でも、それいつも失敗してるんだよね……。」
うーん、と二人で考え込む。

まあ普通に部屋に吊るすのが一番楽だとは思うのだが。

「あ、そうだ！」

銀河が何か思いついたように言った。

「ちよつとこつち来て。」

銀河はそう言つて歩き出した。

沙耶もついていく。

歩くこと約10分。

着いた先は古い寺。

「へえ、こんな所に寺があつたんだ〜。」

沙耶が感心していると、銀河はお祈りをしていた。

沙耶も一緒に手を合わせる。

お祈りが済むと、銀河は本堂の裏にテルテル坊主をくつつけた。

「なんかこつちの方が効きそうだろ？」

「だね。」

二人はもう一回お祈りしてから寺を去った。

第16話 合宿3日目Part2

3日目の夜、テルテル坊主の効果は無く空は曇ったままだった。

途中までは皆高台で待っていたのだが、やがてポツリポツリと部屋へと戻っていった。

沙耶たちもとりあえず部屋で待機することにした。

ただ待つのも暇なので、各自思い思いに過ごしている。

愛花と雄二はテレビで天気予報を見て、銀河は望遠鏡の点検。

そして、沙耶は葵と共に風呂に入っている。

本日2回目の風呂だ。

愛花に「年寄りくさい」と言われたが、ただお菓子を食べながらテレビを見ているよりはずっと健康的なチョイスだと沙耶は思う。

沙耶と葵はしばらくダラダラと喋っていた。

沙耶はふと気付いて言った。

「そういえば、葵ちゃんって全然メイド服着ないね。持ってきてないとか？」

「いえ、一応持ってきてはいます。しかし、『それ着たら皆と話しずらくなっちゃうでしょ？だから着なくていいよ』と銀河様が仰られたので着てません。」

葵が続けて言う。

「私、基本的に知らない人と話すのは余り得意じゃないんです。ですから銀河様はそれを気遣って言うてくれたのでしょう。昔からお優しい方です。」

とても嬉しそうな口ぶりだった。

沙耶はひとつ気になっていたことを聞いてみた。

「そういえばこの前聞かなかったけど、葵ちゃんはいつ頃銀河君と知り合ったの？」

「私が5歳、銀河様が6歳の頃です。」
即答だった。

葵は続けて言う。

「その頃も私は人見知りが激しく、一人ぼっちで公園で遊んでました。そして、その帰り道、車に撥ねられそうになったところを銀河様に助けて頂いたんです。」

どこかで聞いたような話だ。

「そして、お礼に何かしようか、と尋ねたら・・・」

「『一緒に遊ばない？』とか言われたんでしょ？」

「そう。それで・・・ってえーっ!？」

沙耶の不意打ちに心底驚いた様子で声をあげる葵。

「な、なんでそれを・・・？」

「だってその状況、私の時と酷似しすぎだもん。」

沙耶はそう言って自分と銀河との出会いのことを話した。話を聞き終わると、葵は苦笑しながら言った。

「では、私たちは二人とも銀河様に助けられた同士なんですね。」

「そうだね。」

沙耶も顔に微笑を浮かべながら言う。

二人で笑い合っていた、その時。

沙耶は見た。

西の空にあつた雲が、いつの間にか消えていたのを。

そして、そこに星が流れたのを。

沙耶が思わず絶句してその方向を見ていると、葵も気づいた。

そして、駆け出した。

ものすごい勢いで。

それはもうすごい勢いだつた。

更衣室など眼中にないくらい。

嫌な予感がして沙耶は葵を追いかけて走った。

案の定。

葵は裸のまま更衣室から出ようとしていた。

その手を必至に抑えながら、沙耶は叫んだ。

「葵ちゃん、待ちなさい！待ちなさいって!!！」

「いそいで銀河様に知らせないと！」

「その前に服着てないって！服！！」

「服など着ている場合ですか！そんな些細なこと・・・」

「全然些細じゃないから！！むしろ一番大事だから！！」

こうして焦る葵になんとか服を着せることに成功し、二人は無事部屋に到着して同時に叫んだ。

「来たよ！！流星群！！！」

第17話 流れ星の夜

沙耶と葵が部屋に着いて皆に伝えて合宿所を出るまで1分かなかった。

特に愛花と銀河はもうほとんど一瞬だった。

沙耶と葵の横をものすごい勢いですり抜けて行って、沙耶たちが着いた時にはもう高台で寝転がっていた。

沙耶は銀河の隣に腰かけた。

そして空を見上げて、

「うわあ〜」

思わず声を上げてしまった。

すごく綺麗だったから。

丁度西の空だけが晴れており、そこに星が流れていた。

また周りに星が見えないのも、流れ星を際立たせていた。

他の4人も会話とかはほとんどせず、ただただこの風景に圧倒されていた。

それは後からくる先輩たちも同じだった。

皆来たはいいけど、そのまま固まってしまっていた。

しばらくして銀河が口を開いた。

「綺麗だね。」

「本当ね。」

沙耶が星を見ながらも答える。

すると、銀河が思いついたように言った。

「そつえば、さっきつけといたテルテル坊主と同じ方向だね、晴れてるの。」

沙耶はその方向を見て唖然とした。

確かにその方向につけてた気がする。

「だね！効果あったみたいね。」

「そつだね。あとでもう一回お参り行つところか。」

「うん。」

この日も結局望遠鏡の出番は無かった。

結局この3日間、望遠鏡は使わず終いだった。

何とも天体部らしくない合宿だった。

それでも皆満足だった。

こうして綺麗な流星群が見れたのだから。

次の日の早朝、沙耶と銀河は神社へお参りに行った。

テルテル坊主は、きちんと西の空を向いていた。

ある晴れた日のこと P a r t 1

合宿から帰って数日、沙耶は特にこれといったこともせず家でゴロゴロしていた。

というのも特にやる事が無いのだ。

まあ、宿題はちゃんとやってるけど。

しかも外はすごく暑く、用事もないのに外に出る気はさらさら無かった。

そんなある日のこと。

沙耶が2階の窓からぼーっと外を眺めていると、

「だらけてるねえ。」

真向かいの家の窓から声をかけられた。

「あなただって同じようなもんじゃない、銀河君。」

銀河は髪はバサバサで、顔を扇子で仰いでいた。

まるで今起きたかのような雰囲気だった。

いや、まあ今起きたんだろうけど。

少なくとも人のことを言えた状況ではない。

そんな銀河が唐突に言った。

「だからちよつと提案なんだけど、どっか一緒に出かけない？」

「はい？」

沙耶が驚きながら尋ねる。

「暇でしょ？だから。このままダラダラ過ごす時間の無駄じゃん。」

「

「まあ、そりゃあそうかもしれないけど、行くあてはあるの？」

「無いよ。でもいいじゃん、こういうのも。少しは家から出ないと体も鈍るし。」

何ともいい加減な提案だった。

でもしばらく考えた後、沙耶は承諾した。

こういうのも楽しいかな、ってちよつと思っただから。

それに・・・銀河と二人で過ごせるのもちよつと嬉しかったから。
こうして二人は服を着替えた後、出かけた。
何の目的もない散歩に。

それは丁度12時を回った頃。
雲ひとつない快晴の空。

太陽は真上に上り、影はほとんどなかった。
最高気温35度は越えそうな、そんな天気の日だった。

第19話 ある晴れた日のこと Part 2

散歩へ出た二人はとりあえず昼食をとることにした。

というのも銀河が歩いて5分ほどで空腹を訴えたからだ。

今日起きてからまだ何も食べてないそうだ。

それではお腹もすくだろう。

そういうわけで二人は駅前の喫茶店に入った。

銀河はサンドウィッチを、沙耶はそこまでお腹は減って無かったのでチョコレートパフェを頼んだ。

こうして、二人は昼食を食べながら（沙耶はチョコレートパフェだからどちらかというとデザートっぽいが）しばらく雑談していた。

食事がある程度進んだ頃、沙耶は一つ気になっていたことを聞いた。

「朝遅いつて言ってたけど、葵ちゃんに起こされたりはしないの？」

「いや、葵はむしろいつも俺が起こしてる。」

銀河がサンドウィッチを食べながら答えた。

葵ちゃん、一体何時に起きてるんだろう・・・

というかそれ以前にご主人様に起こされるメイドって・・・

葵ちゃん、メイドの勉強する前にまずそこから頑張らないと。

沙耶が心の中で突っ込んでいると、

「じゃあ、そろそろ行かない？」

銀河が言った。

沙耶が驚いて顔をあげると、いつの間にか銀河の食器が空になっていた。

どうやら突っ込みを入れているうちに銀河の食事が終わっていたようだ。

「次どこ行くの？」

店を出て、商店街を歩きながら銀河に訊くと、

「決めてない。適当にブラブラ歩こうよ。」

といい加減な答えが返ってきた。

まあ、この計画自体最初からいい加減なものだったから仕方ないと言えは仕方ないが。

こうしてしばらくの間駅前の商店街をブラブラ歩くことになった。しかし、この暑い中「ブラブラ歩く」という作業はなかなか辛いもので、30分ほどで二人とも汗だくになって疲れてしまった。

沙耶の提案で、駅前デパートに入ることになった。

まあ、沙耶が言い出さなくても銀河が提案してただろうけど。

デパートの中は冷房が効いてて天国だった。

二人はしばらくベンチに座って涼んだ。

沙耶が涼みながら前方を見ると、水着売り場があった。

もう海水浴の季節なんだな、と思いながら店頭に立っているマネキンの来ている白いビキニをじっと眺めると、

「それ、沙耶さん着たら似合いそうだね。」

銀河に話しかけられた。

「いや、ああいうのってスタイルのいい人とかが着るものでしょ？私じゃ無理。」

沙耶が自分の体を見ながら言った。

正直そこまで自分の体に自信はない。

「大丈夫、沙耶さんの体なら大丈夫だって。」

銀河が熱く主張したので、

「銀河君、その発言なんかセクハラっぽいよ？」

沙耶はサラッと微笑を浮かべながら返した。

「いや、そうじゃなくて・・・」

銀河は赤くなりながら、一生懸命取り繕おうとして何かブツブツ言っていたが、やがて沙耶の目を見てこう言った。

「でも沙耶さんなら絶対似合うと思う。」

普通なら適当に誤魔化していたのだろうが、沙耶は数秒間何も喋れなかった。

銀河の目はとてもまっすぐで。

嘘などは絶対についてないような目で。

沙耶は思わずドキリとしてしまった。

こんなこと今まで無かったのに・・・
数秒混乱した後、沙耶は微笑んで言った。

「そうね。じゃあ、考えとくね。」

こうして、二人は水着売り場を離れた。

二人はしばらくデパート内を色々歩き回り、デパートを出たのは結局5時すぎだった。

この後銀河が用事があるということで、駅で別れることになった。

沙耶は特に寄るところも無いのでそのまま帰宅した。

家に帰るとすぐに電話が鳴った。

相手は雄二だった。

「久しぶり～。来週暇かな？良かったら海でも行かない？良かったら・・・愛花も誘って。」

いつも通り愛花と出かけたらしい。

沙耶はOKのサインを出すと、早速水着を買いに行った。

さっきのデパートに。

第20話 海水浴1日目 Part 1

集合地は銀河の家の前だった。

銀河の家の人が車で送ってくれることになったからだ。

電車で行くのが当初の予定だったが、銀河の親が許さなかった。

「電車では窮屈だから。」

「楽に移動できないから。」

「道に迷うかもしれないから。」

だそうだ。

色々言われて結局説得できなかった、と銀河は言っていた。

まあ、電車賃浮くし楽ではある。

沙耶は出発の準備を終え、ベットにうつ伏せになりながら窓の外を見ていた。

集合地が家の前なので、時間ぎりぎりまでのんびりできるのだ。

集合時間の10分前だが、まだ誰も来てなかった。

もう一度荷物でも確認しようかと体を起こすと、銀河の家の窓から信じられない情景が沙耶の目に飛び込んできた。

なんと、銀河がまだベットで寝ているのだ。

安らかに。

沙耶は咄嗟に自分のベットの脇にあった野球のボールを、銀河の部屋に思い切り投げ込んだ。

それは見事銀河の顔を命中し、銀河が慌ててベットから落ちるのが見えた。

そして時計を見てさらに慌て、着替える為カーテンを閉めた。

「できるだけ早くお願いね！」

沙耶はカーテン越しに叫ぶと、

「了解！頑張る。おい、葵起きろ！時間マズいぞ！」

という声が返ってきた。

どうやら葵も眠っていたらしい。

結局銀河たちの準備が終わったのは、予定集合時刻を1時間ほど過ぎた頃だった。

それまで沙耶は、愛花と雄二を家の中に入れて3人でコーヒを飲んでいた。

銀河と葵が謝罪をしながら向いに来たので、沙耶たちは銀河の家の車のあるところまで進んだ。

沙耶は車については詳しくなかったが、銀河の車を見たとき、それが高級車であることは何となくわかった。

雰囲気というかなんというかそういうオーラが出ていた。

しかもしっかり運転手つきである。

さすがはお金持ちである。

沙耶たちはその車に乗り、海水浴へと向かった。

第21話 海水浴1日目 Part 2

予定の海水浴場についたのは午後3時頃だった。時期が時期なだけに相当混んでいたが、銀河はきちんと場所を取っていた。

まあ、両親が勝手に取っておいただけみたいだけど。

しかも場所は更衣室の近くなので、いちいち更衣室との往復しないで済みそうだ。

荷物は銀河のお手伝いさんたちが運んでくれると言うので、（これも銀河は頼んだ覚えは無いと言っていた）5人はとりあえず海に入ることにして、更衣室に入った。

更衣室は結構空いていた。

まあ、3時って結構微妙な時間なのかも。

沙耶が水着を着ながらそんなことを考えてると、すでに着替え終わっていた愛花が沙耶の着替えを見ながら、

「ちょっと成長したんじゃない？」

と言った。

まあ、何のことを言っているのかは大体想像がついたのでスルーすることにした。

沙耶がスルーすることは予測済みだったのか、愛花は今度は葵に話しかけた。

「葵ちゃんも1年後に期待だね。」

「余計なお世話です。」

葵がむくれながら返す。

愛花は構わず続ける。

「葵ちゃんも沙耶みたいに揉んでみたら？もしかしたら大きくなるかもよ？」

「私そんなことしてないから！」

沙耶が思わず突っ込む。

「なるほど、そういうものですか。今度試してみます。」

「葵ちゃん、真に受けないで！嘘だから！！」

沙耶が叫ぶと、愛花がまた余計なことを言った。

「そうよね。沙耶は銀河にやってもらってるんだもんね、毎晩毎晩。」

「え！？そんなんですか？では、私もお願いしてみようか・・・。」

「だから違うって！葵ちゃん、愛花の嘘に惑わされて銀河君に変なこと頼まないでね。」

このような疲れる会話を経て、ようやく沙耶は着替え終わった。

沙耶が着替え終わると、愛花が少し驚いた様子で訊ねてきた。

「その水着、自分で選んだの？」

「うん。まあ推薦してくれたのは銀河君だけど。それがどうかした？」

「いや、いつも地味な水着しか着ない沙耶がビキニ着るとは思わなくて。」

まあ、確かに銀河と買い物に行ったあの日まではこれを買うつもりもなかったし、着るつもりもなかった。

どうしてこうなったのかは正直わからない。

ただ、「絶対似合う」なんて真つすぐ言われたのは初めてで。そう言ってくれた銀河にその水着を着て見せたくなつたのだ。

スルー中の沙耶をよそに愛花が続ける。

「そっかー。銀河君そういうのが好きなんだー。葵ちゃん、スク水なんて着てる場合じゃないよ。もうスク水の時代は終わったんだよ。」

「余計なお世話です。それに別に好きで着ているわけではなく、両親がこれを送ってきたから仕方なく着ているだけです。」

「大丈夫、大丈夫。似合ってる似合ってる。」

「さつきと言ってることが違うんですが。」

「まあ、気にしない気にしない♪」

こうしてくだらない会話をしながら、3人は更衣室を出た。

第22話 海水浴1日目 Part 3

沙耶たちが自分らのビーチのところに戻ると、雄二と銀河がすでに着替え終わって砂の上に寝転んでいた。

雄二はピンク色のビキニ姿の愛花を見て言葉が出ない様子。

何か言おうとしているのはわかるのだが、言葉になっていない。

銀河は最初こそ沙耶の水着をみて驚いていたが、今はとても嬉しそうな顔でこちらに近づいてきて言った。

「沙耶さん、それ買ってくれたんだ。うん、やっぱりすごく似合ってるよ。」

「え、そうかな？あ、ありがとう。」

「やっぱり沙耶さんには白が似合うね。すごい綺麗だよ。」

「銀河君、褒めすぎだよ……。」

水着を見せて銀河を驚かしてからかう予定だったのが、逆にこっちがからかわれてる気分だ。

「じゃあ、とりあえず泳ごつか。」

この空気を打開すべく沙耶が言っと、

「おう、行こう行こう！」

とその言葉に便乗した雄二が、真っ先に海に飛び込んで行った。残された4人も、笑いながら海に入って行った。

結局その後2時間ほど遊んだ後、一旦宿に引き上げることにした。

沙耶たちが銀河の車に乗って約10分ほどでそこに着いた。

しかし、そこにあっただのは一般に「宿」と呼ばれているものではなく、

「豪華ホテル……。」

「豪華ホテルだ……。」

「豪華ホテルね。」

沙耶・雄二・愛花が揃って感嘆の声を上げていると、さらに驚くべきことが起こった。

何とホテルで働いている人の全てが外に出迎えているのだ。

改めて銀河の金持ちさ加減を実感してしまった。

当の銀河は慣れた様子で、おそらくこのホテルの管理人と思われる人にお辞儀をしてホテルの中へ入って行った。

沙耶たちも慌ててその後について行った。

さすがに銀河なしでこの空気は耐えられなかった。

そして、行き着いた先は大広間だった。

そこには、先に持って行ってもらっていた5人のバックが置いてあった。

5人はそれぞれのバックの傍に座り、しばらく雑談した。

「相変わらずうちの両親は過保護なんだから……。あれほど普通のホテルでいって言ったのに。」

と銀河が始終愚痴をこぼしていたのには皆苦笑いしていた。

こちらから見れば羨ましすぎる環境だからだ。

まあ、確かにさっきの出迎えは異様だったけど。

「じゃあ、そろそろ部屋に移動しようよ。部屋は個別？」

一通り話したいことは話しかった沙耶が訊くと、

「うん、個別。401と405号室のどれ使ってもいいよ。ちなみにここが405号室ね。」

と銀河が返した。

一瞬部屋が静まり返ったような気がした。

そして、沙耶がおそらく誰もが思っているだろうことを言った。

「これ、部屋だったんだ……。」

第23話 海水浴1日目 夜

沙耶がシャワーを浴び終わって、ベッドの上に仰向けに寝転がっていると、雄二がノックもせず部屋に入ってきた。

「ノックくらいしなさいよ。着替え中だったらどうする気？」

沙耶が言うと、

「お前が着替え見られたくらいで気にするか？大体着替え中に部屋の鍵開けとく方か？」

と失礼な反応を返した後、

「ところでトランプやらないか。暇でしょうがない。」

と提案した。

まあ、別にすることもないので了承した。

まあ、雄二が誘ったのは当然沙耶ではなく・・・、

「じゃあ、愛花も誘つていてくれる？俺は部屋で準備しとくから。」と相変わらずのヘタレっぷり。

ようは愛花を誘いたいのだが部屋へ誘いに行く勇気が無いということだろう。

「ねえ、たまには自分で誘ってみたら？その方が愛花も喜ぶかもよ？」

沙耶は最近ずっと思おうと思っていたことを言ってみた。

「はい？何で愛花が喜ぶんだよ。今は俺の片想い中だぞ。」

雄二が反論する。

そんな堂々と言うことじゃないと思うんだけどな・・・。

「そんなの分かんないじゃん。もしかしたらってことも・・・。」

「いやいやいや。無いって。それは。」

そんなことないんだけどな・・・。

まあ、確かに愛花は表情が読みにくいし、分かりづらいことは認める。

沙耶もあの能力が無かったら分らなかっただろう。

確か愛花の心の中にそんな気持ちが芽生え始めたのは合宿の時だったと思う。

おそらく沙耶の知らないところで何か特別なことがあったのかもしれないが、よくわからない。

第一張本人の雄二が気付いていないところを見ると、もしかしたら本当に些細なことだったのかもしれない。

雄二が鈍感なだけの可能性もあるが・・・。

まあ、こんな話を雄二にしたって仕方ないので、沙耶は愛花を呼びに行った。

沙耶がノックすると、愛花が浴衣姿で現れた。

「どうしたの？何か用？」

「トランプやるんだってさ。雄二の部屋集合。」

「ふーん、了解。後から行くから待ってて。」

愛花は答えると一旦部屋に戻った。

1分ほどして愛花は部屋から出てきた。

ただ、髪型がポニーテイルになっていた。

理由を聞くと、トランプの時に邪魔になるからだと答えた。

たぶん本当の理由は雄二と会うためのオシャレなんだろうな、と思ったが、口に出したりはしなかった。

どうせ聞いたって愛花がそんなこと答えてくれるわけないし。

というわけでポニーテイルの愛花を連れて雄二の部屋に入って行った。

部屋に入ると、もう銀河と葵は床の上に座って待っていた。

そして案の定、雄二は愛花の髪形を見て固まってしまっていた。

相変わらず面白い、っていうかわかりやすいヤツだ。

愛花も雄二のこの反応に満足の様子だった。

5秒ほどで立ち直った雄二を中心に、トランプが始まった。

第24話 海水浴1日目 深夜

数時間後・・・。

最初に力尽きたのは葵だった。

トランプを切っているほんの数秒の間に、銀河の肩に頭を乗せて安らかに寝息を立てていた。

「んー、じゃあ終わりにするか。明日もあるし。」

雄二の提案に異論を唱える者は居なかった。

「じゃ、俺は葵運ぶか・・・。沙耶さん、鍵開けてくれる？」

「いいけど、鍵は？」

「俺が合い鍵持つてる。っていうか葵に事前に持たされた。」

と言つて銀河は沙耶に鍵を渡し、葵を抱き上げた。

抱き上げた際、ちよつとよろけたようだが何とか大丈夫のようだ。

「じゃ、おやすみ。雄二。愛花はどうする？」

沙耶が部屋のドアを開けながら言うと、愛花から驚くべき返事が返ってきた。

「んー、私は部屋の片づけ手伝ってるよ。」

あの面倒くさがりの愛花が部屋の片づけ？

どっか頭でもぶつけたのかな？

とりあえず私と会ってからぶつけてないよね、たぶん。

つてことはぶつけたのは私と会う前かな？

いや、その前にそんな部屋散らかってたかな？

あたりをざつと見渡したが、特に散らかったようには見えない。

ここまで考えて沙耶はピンと来た。

まあ、思考の大半は愛花にとって失礼なものだったが。

おそらく愛花は雄二と少しでも長く居たいんだ。

だから、「いや、そんな部屋散らかってないからいいよ。」と答え

ようとした雄二の足を蹴とばし、目で合図してやった。

それでもよくわかっていなかったようだが、とりあえず承諾はした

ようだった。

相変わらずの鈍感ぶりだ。

まあ、相手があの無表情の愛花じゃ仕方ないと言えば仕方ないかもしれないけど。

沙耶は、今のやり取りを微妙な視線で眺めていた銀河を引っ張って部屋を出て行った。

「愛花ってああいう性格だったっけ？真っ先に帰るものとか思ってたんだけど・・・。」

廊下を歩きながら怪訝そうな顔で銀河が尋ねてきたので、沙耶は答えた。

「さあ？頭でも打ったんじゃない？どっかで。」

第25話 海水浴第2日目

結局沙耶はその後銀河と一緒に葵を寝かせた後、部屋に帰ってすぐに寝てしまった。

実は沙耶も相当疲れてたのだ。

あの時葵が寝なくても中断を呼び掛けていただろう。

だからベッドに潜ると、時計も合わせずすぐに寝てしまった。

そう、時計もあわせず・・・。

というわけで沙耶の海水浴2日目は10時から始まった。

予定は8時だったのだが・・・。

沙耶は飛び起きて、とりあえず部屋から飛び出した。

しかし、そこで異変に気づく。

人が活動した形跡がないのだ。

「まさか、皆先に行っちゃったのかな・・・？」

そう思いとりあえずホテルのフロントに行ってみると、外出した記録は無いとのこと。

ということは・・・。

「皆起きて～～！！」

結局起きたのは沙耶が一番早かったようだ。

訊くと、愛花と雄二はあの後2時間ほど二人で遊んでいたらしい。

また、銀河は沙耶と別れた後、部屋に帰ってテレビを見ていたらしい。

そして葵は・・・あのままずっと寝てたみたいだ。

相変わらずすごい睡眠時間だ。

というわけで結局昨日トランプを途中で止めた甲斐もなく、沙耶が皆を起こし終わって皆で朝食を食べ終わったのは12時近い頃だった。

まあ、唯一の救いは海に行ったのが昼食時だったので人があまり居なかったことだ。

「良かったじゃん、結果オーライで！」

「私たちが寝てたおかげね。」

雄二と愛花が口々に言うのを聞いて、ただただため息をつくばかりの沙耶に、銀河が言った。

「まあ、寝坊したもんは仕方ないじゃん。その分遊びまわろうよ、これから。」

「まあ、確かにそうなんだけどね・・・。」

こうして、海水浴第2日目が始まった。

第26話 海水浴2日目 Part 2

午後2時頃まで遊んだ後、沙耶たちは遅めの昼食を食べに行った。丁度昼食を食べ終わった人々が海に入ってきて混雑したからだ。店はかなり空いていた。

普段なら行列ができているような店なのだが、丁度いい時間だったようだ。

今朝寝坊したのが逆に救いになっていると感じた。

沙耶たちは、とりあえずここでこの後の予定を立てることにした。

「予定って言ってもなあ・・・あんなに混んでたらロクに泳げないよ。」

雄二が海の方を見ながら言う。

「雄二さつき誰かと衝突してたもんね。」

愛花がクスクス笑いながら指摘する。

愛花の話によると、雄二はさつき泳いでいる最中に、反対から泳いできた人とすごい勢いで衝突したらしい。

確かによく見ると額のあたりがちよっと赤くなっている。

「むしろもう帰るってのは？部屋でトランプとか。」

雄二の提案に、

「それじゃここに来た意味がないでしょ。トランプなんかいつだってできるんだから。」

沙耶が反対意見を出した。

「でも、こんなに混んでるんじゃ何もできないぜ？何か提案があるんじゃないけど。」

銀河の言葉に、皆が黙り込む。

すると、さつきからずつと海の方を見ていた銀河が初めて口を開いた。

「じゃあ、釣りとかどう？」

「釣り？」

葵が首を傾げながら訊く。

「そう、釣り。今あっちの方見てたら、丁度釣りの出来そんな岩場があつてさ。あそこなら人もあんまり居ないし、どうだろう?」

「竿とか餌はどうするの? 持ってきてないよ、そんなの。」

沙耶が質問すると、

「大丈夫。さつきここの店に来る前に、何か店があつたら? そこで借りれるみたい。」

銀河がその店を指さしながら言った。

「成程、釣りか。面白そうだな。」

「それじゃ、一杯釣つて塩焼きにして食べよつか。」

雄二と愛花も乗り気のようなうだ。

「まあ、食べれるような魚は無いと思うけど・・・」と銀河が軽く突っ込んでいたようだが、勿論愛花の耳には入っていないようだった。

「葵ちゃんは大丈夫?」

沙耶が訊くと、

「大丈夫です。というか楽しみです。魚食べたいです。」

との返答。

銀河はもう突っ込むのを諦めたようで、「それじゃ、行こうか。」と言って席を立った。

こうして沙耶たちの午後の予定は釣りに決定した。

第27話 海水浴2日目 Part 3

「何よこれー！、全然釣れないじゃない。」

愛花が隣で文句を言っているのが聞こえる。

まあ、確かに文句を言いたいのもわかる。

ここに来てから1時間くらい経つが、まだ一匹も釣れていないのだ。釣り方が上手い上手くないの問題ではなく、釣り糸がピクリともしないのだ。

つまり、魚がいないのである。

「おかしいな、釣れると思ったんだけどなあ・・・。」

銀河が頭を掻きながら謝る。

「やっぱり釣れないんじゃないか？」

「だったら釣り道具を貸す店なんか無いと思うんですが。」

雄二の言葉に葵が的確に突っ込む。

「きつとそのうち釣れますよ。」

「うーん、でも制限時間残り1時間よ？このままじゃ1匹も釣れないよ。」

愛花の言葉に皆黙るばかりだ。

そう、この竿と餌は2時間しか借りられないのだ。

それ以上やると延滞料金を取られるらしい。

文句を言っているけど仕方ないと5人は再び作業を再開した。

しかし、さらに30分経つても魚が釣れる気配すら無かった。

すると、愛花が唐突に立ち上がり、

「きつと場所が悪いのよ。私ちょっと向こう見てくる。」

と言って歩いて行ってしまった。

そして、その愛花を「待てよー、餌忘れてるぞー！」と言いながら雄二が慌てて追いかけて行った。

二人を見送った後、葵も立ち上がり、

「私、さっきの店で色々聞いてきますね。ちゃんといつも釣れてる

のかどうか。」

と言いながらさつき来た道に戻って行った。

こうして、結局その場に残ったのは銀河と沙耶の二人だけになってしまった。

「何かごめんね、こんなことにつき合わせちゃって。後で皆にも良く謝っておかないと。」

銀河がこちらを向いて謝ってきたので、沙耶は慌てて答えた。

「いや、別に大丈夫だよ。いい時間つぶしになったし。それに私的には少し助かったと思ってる。」

「え？」

「だってここ来てからあんまり落ち着ける時間って無かったじゃない？だからこうやってのんびりしてる時間があるっていうのもいいかも、って思っただけ。」

これは本音だ。

昨日は昨日で気を遣いすぎて疲れていたし、今日も寝坊したり泳ぎまくったりで余りこういうのんびりした時間を取れていなかったのだ。

だからこれはこれで満足している。

銀河はしばらく啞然としていたが、やがてフツと笑みを浮かべると、

「沙耶さんは優しいね。」

と言った。

「へ？いや、そうじゃなくて私は・・・」

沙耶が顔を紅らめて弁解しようとしたその時、沙耶の釣り竿の糸がクイと引かれた。

「あ、沙耶さん、釣れてる釣れてる！」

「え！？あ、ホントだ！」

「沙耶さん、慌てないでゆっくりね。そう、慎重に慎重に。」

沙耶は、銀河の言うとおりに糸を引いていった。

5秒ほど慎重に糸を引いた後、銀河の言葉に従って思いきり糸を引き上げると、1匹の魚が釣りあがるのが見えた。

その魚は・・・大きく頬を膨らませたフグだった。

第28話 海水浴2日目 Part 4

結局収穫は沙耶の釣ったフグ1匹のみという寂しい結果に終わった。もちろんふぐの毒を完璧に抜ける自身もなく……。

ふぐを海へ返すのは妥当な選択といえた。

「ごめんね、皆。釣りやろうなんて言いだして。ここまで釣れないとは思わなくて。」

銀河が再び謝った。

おそらく雄二と愛花から先程と同じように文句を言われるだろう、沙耶はそう考えていた。

もちろん銀河もその予定だっただろう。

しかし、二人からさっきとは別人のような反応が返ってきた。

「いや、まあ結構良かったんじゃないか？」

「案外こういうのも悪くないわね。」

沙耶も銀河もただただ茫然とするばかりだった。

別にこの言葉だけなら、ただ銀河に気を使ったただけだと思うだろう。

しかし、雄二はともかく愛花はそんなことをするタチではないし、何より本当に満足そうな顔をしているのだ。

「そ、そうか、それなら良かった。」

銀河は不思議そうな顔をしながらも、満足気に頷いた。

「あれ？そういうえば葵ちゃんは？」

「そういうえばさっき文句言いに行ってから見てないな。何してるんだろう？」

沙耶と銀河が話していると、丁度葵が向こうの方から走ってくるのが見えた。

そして嬉しそうに銀河にある券を渡した。

それは……何故かスキー無料招待券だった。

「何か、さっきのところにいたおじさんに文句言ったらこれくれたんです。これでスキーも行けますね。」

満面の笑みで説明する葵。

4人は一瞬、どう突っ込んでいいやらといった様子で啞然としたが、銀河が口を開いた。

「そ、そっか、良かったね、葵。」

「うん。」

ニコニコしながらうなづく葵。

「なあ、俺色々突っ込みたいんだけど・・・。」

「この流れは突っ込んだら負けよ。我慢しなさい。」

隣で雄二と愛花の呟き声が聞こえたが、確かに何となく突っ込める雰囲気では無い感じがした。

そういうわけで、数ある突っ込みを心の中に秘めながら、沙耶たちは釣り竿と餌を返した後、宿へと向かった。

第29話 海水浴2日目 Part 5

宿に帰ると、すでに夕食の支度ができていた。夕食は鍋のようだった。

いや、たぶん鍋なのだろう。

ただ、スケールが通常と違うのでばつと見ただけでは分からなかった。

例えて言うなら、バケツという言葉が相応しいだろう。

こんな大きな鍋を見たのは生まれて初めてだった。

「お代わりの準備も整っております故、もし量が少ない場合はお呼びください。」

そう言つて、ホテルの管理人らしき人は隣の部屋へ戻って行った。

「いや、お代わりつてなあ……。」

銀河が呟く。

「お代わりつていうかお変わり者だよ、それじゃ。」

「雄二君、つまらない……。」

雄二も愛花も呆れた顔で鍋を見ている。

やはり考えることは皆同じのようだ。

「とりあえず食べてみようよ。もしかしたら意外に入るかもしれないし。」

提案してみたものの、沙耶も5人でこの量を食べ切れる自信は無かった。

30分後。

予測に反し、鍋の中身は空になっていた。

「意外に食べちゃうもんなんだな。」

寝そべりながら苦しそうに言う雄二。

「ほんと、よく食べれたよね。」

「雄二がすごい勢いで食べてたからね。でも、もうこれ以上は入ら

ないけど。」

そう言いながら寝転がる沙耶と銀河。

「食べ過ぎた時は右側を下にして寝るといいらしいですよ。」

そう言いながら右を下にして寝転がる葵。

「帰ったら少しダイエットが必要ね。これで絶対体重増えた。」

一人体重のことを懸念しながら、ちゃっかり右を下にして寝る愛花。しばらくの間5人は動けずに鍋を囲んで転がっていた。

「これからどうする？またトランプか？」

相変わらず苦しさのとれない雄二が訊く。

「あ、それならもう考えてあるよ。」

そう言いながら銀河が鞆から何かを取り出した。

それは、花火だった。

「何かここに来る前の夜に、偶然部屋片付けてたら見つけてね。勿体ないから、と思つて。」

銀河が説明する。

「いいね。やろうよ。」

「いいんじゃない？連続でトランプじゃ飽きちゃうし。」

「俺はトランプでも良かったんだが・・・まあ、こっちも面白そうだしいいか。」

「良いと思います。」

4人とも口をそろえて賛成の言葉を言った。

「それじゃ、今日の11時あたりにロビーで集合ね。」

そう言つて5人が立ち上がろうとしたとき、部屋のドアが開いた。開けたのはホテルの管理人だった。

「お客さま方、お粥の準備ができました。鍋に入れて5分ほど待てば出来上がります。熱いのでお気をつけて召し上がってください。」

そう言つてバケツのような容器を置いてまた部屋を出て行った。

その容器には・・・ぎっしりと白米が詰まっていた。

5人はただただ顔を見合わせるばかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4521c/>

HEARTS

2010年12月29日02時19分発行